

## 議 事 要 旨

会議の名称	令和6年度第2回大田区地域福祉計画推進会議
開催日時	令和7年1月24日(金) 午前10時～11時45分
開催場所	蒲田地域庁舎 5階 大会議室 (WEB会議併用)
欠席委員	山下委員、横川委員
会議次第	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 開会 (事務局から注意事項等説明)</li> <li>2 会長ごあいさつ</li> <li>3 議事             <ul style="list-style-type: none"> <li>「地域福祉の推進に向けて ～支援者が孤立しないために・地域の居場所について～」</li> <li>(1) テーマ型意見交換会実施結果報告及び意見交換                 <ul style="list-style-type: none"> <li>ア テーマ①「支援者が孤立しないために」報告 意見交換</li> <li>イ テーマ②「地域の居場所について」報告 意見交換</li> </ul> </li> <li>(2) 次年度の検討テーマ出しについて</li> </ul> </li> <li>4 推進委員の任期満了に伴う次期委員について</li> <li>5 次回の予定</li> <li>6 閉会</li> </ol>
会 議 経 過	
<p>1 開会 事務局から配布資料の確認、欠席者・傍聴者のご案内をした。 福祉部長から冒頭のあいさつをした。</p> <p>2 炭谷会長ごあいさつ 炭谷会長から冒頭のごあいさつがあった。</p> <p>3 議事 「地域福祉の推進に向けて～支援者が孤立しないために・地域の居場所について～」 (1) テーマ型意見交換会実施結果報告及び意見交換 ア テーマ①「支援者が孤立しないために」報告 事務局から報告した。</p> <p>意見交換 【濱委員】 参加したグループディスカッションは、多岐にわたる機関の参加者がいたため有意義な時間だった。私の事業所でもカスタマーハラスメントが起きているので、そのことについて、グループの中で聞いていただいたこともありまして、よかったですと思います。現場は孤立していてそれをどうやって共有するか、ケアマネジャーは一人仕事になりやすい職種なので、事業所に持ち帰って共有できるか、事業所は役所と連携できるか、つなぎを何層にもしなければいけない。つなげるための労力がさらに必要になるため、区が担うのが重要だと思う。多機関連携窓口など、区の皆さんにぜひ頑張ってくださいたい。ただ、区の職員の中で、違う立場の方をまきこんでつなぎ合わせる経験値があまり培われていないのではないかと。職員の人材育成に期待する。</p> <p>【石田委員】 テーマ型意見交換会の包括的相談支援編に参加した。 普段私は介護・高齢分野で仕事をしているが、普段は関わりの少ない若者分野や、こども分野の参加者もあり、立場や視点の違いもあって非常に参考になった。</p>	

支援者が孤立しないためにクレームやカスハラ的な方には、チームで対応するなどの対策をとっている。

ケアマネジャーの立てたケアプランに沿って事業所もサービス内容を決めるため、クレームなどがあった場合には「サービス内容に関することはケアマネさんにご確認ください」とケアマネにクレームが回ってくることも多い。利用者宅へ1人で訪問するため、カスハラ的な被害の対象になることもある。実際にカスハラがあった方へは2人で訪問したり、管理者へ担当変更をお願いすることも以前あった。普段からミーティングで情報交換にも努めている。

来年度からカスハラ防止条例が東京都で施行されるため、当法人でも法人内各施設にカスハラ防止のポスターを掲示するなど既に対策を取り始めている。

#### 【佐藤委員】

カスハラ対策は、不適切なお客様の行動から従業員を守るためのもの。明確な社内での基準や従業員育成が必要です。一方で苦情対応は、正当な苦情やご不満を受け止めて課題を解決していくための対応。そこに行くまでに孤立されていて、どこに不満や不安をぶつけたらいいかもわからない期間が長かった方が相談に来て、やっと不満や不安を出すことができたというのは大きなプロセスであると思う。そうしたことを理解したうえで、相手のもしくは相互の理解やサービスに満足していただくための向上につなげていくためには組織で研修したり、対応を共有していくことが必要だと思う。

また、支援を受けること自体に抵抗がある方もいる。支援をしようとしても関係構築がうまくいかないケースについては、例えば重層的支援会議で協力者・チームを活用して、単一の機関や一人だけで相談者を抱え込まないことが必要だと思っている。まず受け止めのルートや支援者の方も頼れる場を一緒に作っていくということで、私たちもより一層来年度に向けて重層的支援会議を活用しようと思う。

#### 【炭谷会長】

それぞれの事業所・施設ではカスハラに苦勞されていることと思う。済生会でも現在、検討会を開いていて、今年の6月頃に目途に報告書を出したいと考えている。その中の大きな柱として組織としてしっかり対応する、と明確に打ち出していきたいと思っている。また、済生会としてやってきたことで、職種間の連携を綿密・円滑にするという観点から、日本で唯一の、済生会地域包括ケア連携士という資格をもった人材の養成を行っている。平成28年度から500名の人材育成を目標とし、職種間の連携をよくするという目的で進めてきた。大変効果があるということで、500名の目標は達成したので、他のところから済生会の研修を受けたいという話がありましたので、北海道などでこの研修を実施している。しかし、先ほどの3名の委員の話にもあったとおり、カスハラは解決が難しい一方、利用者の人権を守ることも重要なので、正当なクレームなのか見極めることが重要だと思う。

#### 【北畠委員】

意見交換会という取り組み自体が、関係する多様な主体が、一緒に小規模な講演を受講して共通認識を形成したうえで、意見交換をするということで、勉強とネットワーキングの両方の意味があるため、大事な取り組みだと思う。

内容に関しては、支援する側へのサポートは、安心して働ける環境を作るために重要だと思う。クレームはカスハラなのか正当な苦情・訴えなのかのラインは微妙な部分もあると思う。そこが対応した個人だけでとどまらず、あるいは組織の中だけでとどまらず、いろんな立場と情報や事例を共有して、相対化することで対応の妥当性もわかってくるのではないかな。情報の共有やストック、対応の妥当性について、共通認識を形成していくことが重要だと思う。

意見交換会のほかにたとえば、事例をストックしたり、対応方法の共有やストックをする機会、プラットフォームみたいなものは既にあるのか、これから作ろうというお考えはあるか。

#### 【事務局】

カスハラに限らず、重層事業を始めているおかげで、様々な事例をストックできつつある。その事例を大田区福祉人材育成・交流センターの研修に生かすことに取り組んでいたり、それを事例化してeラーニングに取り入れている。いろんな事例を分析していくことも重要です

し、福祉の場合は、カスハラと複合的な課題が混ざっているのので、振り分けていく必要があると思う。複合的な課題には支援対応をしなければいけないし、起きてしまったカスハラに対してはカスハラ対応をしなければいけない。整理しながら重層的支援会議の中では取り組んでいる。一人では判断が難しいので、みんなで分析しながら進めていくことが重要だと事務局も考えている。

#### 【齋藤委員】

この取り組み・報告は重要なことだと感じた。特にカスハラなのか、苦情なのかを認識すること、組織としてどう対応するかが働く人を守ることなのだと改めて感じた。介護分野に限らず、このような状況が起きていて、おそらく訪問型のところが1対1になりやすいため、一番厳しい状況が出やすいとは思いますが、そのほかの場所でもカスハラが発生したままの状態です仕事をしている可能性があると思う。介護系以外にもカスハラの問題を広げてもらえればと思う。

普段穏やかな人でも、長年暴力被害などを受けていると、しばらくして安定期に入った時、怒りの感情が抑えられなくなる人が多い。そのときに攻撃的になっていくことがあるので、治療的なアプローチが必要だと思いますが、職員たちも、急に攻撃的になったのはなんでだろうと疑問を感じることがあるため、研修による育成が必要だとも思う。職員は、自分が未熟だからと思って、そのような利用者を受け止めているかもしれないと改めて感じた。

#### 【奥田委員】

民生委員の改選時のため、周りの人に声掛けすると、支援者としての負担感が重すぎて難しい、自分ひとりで悩んでしまうので自分には不向きだという理由で断られることが多い。最近民生委員の担い手が少ない理由は、ここにあると思う。私どもが考えなければいけないのは、民生委員同士で個人情報を守るという守秘義務はあるが、支援者どうしでお互いに支えあう目的で、小さなコミュニティで構わないので、意見を交流しながら負担感を軽くしていかないと、支援者の役割を担うのは難しいのではないかと思う。支援者同士のコミュニティの確立を支援者の立場で行い、自分だけで悩まず、わからないことについては他の支援者にサポートを求めていく、当たり前の意見かもしれないが、民生委員・支援者としての立場・コミュニティを守りたいと思う。

#### 【閑製委員】

私たちの会でも、区から知的障害者相談員として相談対応や、見守りということで事業を行っている。ご相談時に、「個別支援を求めて行政に行ったが、思っていたサービスの提供がされないのはどうしてか」という話を傾聴させていただく。

ご家族にも精神的な問題点があるケースや、ご家族の思いだけしか分からず、実はお子さんがどう思っているかはつかめていないというケースもある。いろんな事情を聞いたうえで、再度行政に相談してつながったとしても、自分の意見・思いをちゃんと聞いてくれない、自分が充足していないと思われる。

知的障がいの場合は、ご本人がうまく表現できないと、どうしてもご家族や、ご家族に寄り添っている支援者の気持ちが出てきてしまう。そのため、ご本人としては、ご本人が望む支援をしてくれないと思ってしまい、難しいと感じている。

私たち親の会としても、親の考えではなくて、お子さんたちがどう思っているかをきちんと考えていかなければならない。自分の意見や思いをお子さんからどうやって聞き取っていくか。ご本人の意見や思いを聞いていくように、法律も整備されてきている。私たちが代弁者となるときに、どうやって聞き取って思いをつなげていくかを、もう少し考えていければと思う。様々な課題について話し合うこの機会が、すごくいいなと感じていますし、ぜひみんなが支援制度を利用するために、いい関係での利用の仕方や伝え方を伝えていきたいと実感しました。

#### 【炭谷会長】

カスハラも、利用者と提供者の人間関係がうまくいっていれば、発生しないのだろうと思うと、両者の円滑な関係が重要なことだと思う。個々の取り組みとともに、団体間の取り組み、

団体間の意見交換も効果があるのではないかと思います。

事例を活用するという話もあったが、実はカスハラの実例というのは、内容としては同じようなことが起きていて、大体がパターン化できる。大田区からチラシが出ているとおり、カスハラの実例はほとんどがパターン化されているが、カスハラをうける職員は初めての経験になるため、どう対応すればいいかがわからない。このようなカスハラはかなりの本や出版物などにまとめが出ていますが、このようなことも起こる、その場合はどう対応すればいいかといったマニュアルを整備しておけば、かなりの事例に対応できるようになると考えられる。そのため、e-ラーニングは効果的だと思うし、実際済生会では導入している。

カスハラというのは組織として対応すべき、という意見もありましたが、組織として対応し、個々の職員に任せないということが私も重要だと思います。1対1での対応は、職員の命に関わる事例も場合によっては発生しかねません。そのため、組織として働きやすい条件を作ることが重要だと考えます。

#### イ テーマ②「地域の居場所について」報告 事務局から報告した。

#### 意見交換

##### 【炭谷会長】

居場所で非常に効果があるのはこども食堂だと思う。済生会として全国で10か所ほど開設しているが、単に食事を提供するだけではなく、そこで子どもたちが友達とつきあう、大人は話し合う、子どもたちの孤立が防げるという点を重視して実施している。

##### 【山崎委員】

こども食堂の役割として、元々は貧困家庭・児童への食事の提供からスタートしましたが、活動を続けていく中で、高齢者問題・教育問題・発達障がい・精神障がいの問題にも必ず関わるようになるのが現状である。大田区はこども食堂連絡会に現在約60団体が加盟していて、3か月に1度情報交換をしているが、その中でいろいろな利用者の方がいるということで、先ほどのカスハラの問題などもよく出てくる。居場所という定義が大きくて、私たちもどう定義づけるかが議題に上がるが、例えばカスハラをする利用者がいろんなところで問題を起こして、最終的にこども食堂にくるといった事例がある。居場所という定義だと、その方も迎え入れるべきと考えているこども食堂の運営者は多い。

結局、怒鳴られたり、「助成金もらっているんだから毎日開いて」といった要求をされながら、対話を続けるうちに、「実は精神障がいをもって」とか、「統合失調症なんです」、という話をしてくれるようになる。専門的な医療機関との連携も必要なのではないかという話もよく上がる。

私も含めて、約60団体あるこども食堂は、運営にあたり場所を借りている。賃貸契約をする場合もあるし、自宅を改築してこども食堂をする人もいるが、居場所を確保するにはそれなりの資金繰りが必要になってくる。そもそもがボランティア活動ですので、資金繰りに苦労している団体が非常に多いというのが現状としてあります。

それらを踏まえて、地域福祉の最前線がこども食堂であると、こども食堂連絡会では話している。困っている人が目の前にいる、直接手を差し伸べることができる環境にあるので、なるべく長く続けていきたいという運営者が多い。

##### 【沼本委員】

この居場所ってアメリカの社会学者でオルデンバーグという方が居まして、この方がサードプレイス理論を発表し、世界に広まっている。このサードプレイスを一言でいうと、職場でも家庭でもない、とびきり居心地の良い社会の場所ということではないかと思います。

大田区はSDGs未来都市をめざしておりますし、誰一人取り残さない社会の実現をオール大田で達成しようではないかということで進んでおります。私は以前、この場で区長自ら来て、今日やっているこの会議の趣旨を納得して自らの政策として発表するべきではないか、と申し上げました。ここで私が一番大事だと思うのは、質の高い総合的な福祉社会・環境の実現のた

めには住民意識をどのように深化させていくか。住民に社会福祉の思想というものをどう拡大していくかが、今日ここまでいろいろと検討されたことの集大成として残る課題ではないかと思えます。

そう思うのには根拠がありまして、最近私は住所を移転しました。前の住所では、自治会も民生委員の制度もしっかりしていて、かなり交流意識が高かった。新しく移転したところは、全くと言っていいほど、住民意識の深化・理解というものがありません。私はこのことを大田区的な課題ではないかと思えます。

田園調布から始まって東海道線を挟んで、六郷や羽田地域まで、多彩な方たちがお住まいであると同時に、多彩なマンションが林立していることもあり、余計に住民意識というものが希薄になってくる。隣同士のつながりも希薄になってくる。こういう状態の中で、居場所すなわちサードプレイスをどう創るかとなってくると、住民意識の深化とその拡大というのが必要だと思う。

新たな大田区基本構想の中の一つとして、国際都市大田という観点が一つと、もう一つは教育、福祉を含めた住民意識というものがもっと深く住民の方々に理解されて行かないと、立派に作られたプランが定着しないのではないかと。これをどう深化・拡大していくかという具体策を大田区として作り上げていく時期が来たのではないかと。それが最大の課題ではないかと思えます。特にお年寄りが多い地域は、そういうことが一番大事なのではないかと思えます。

#### 【中原委員】

地域福祉計画と地域福祉活動計画が車の両輪という関係です。先ほど事務局から、地域福祉計画の意見交換会の報告がありました。社会福祉協議会も住民懇談会をやりましたので、その報告をします。昨年の夏頃に、4地域で開催しました。合計で61名参加があり、474件の意見をいただきました。今分析しているところで、どこかで改めてご報告したいのですが、現時点でどういう意見があったかを少しだけお話しします。

地域福祉活動計画の柱は4つあります。

#### (1) つながりづくり

先ほどの区の課題と同じです。そのなかで意見が出たのが163件でしたので、代表的な意見として3つほどまとめて申し上げます。

○防災、障害施策など特定の対象や機会・つながりづくりのテーマ・ニーズが非常に多い。

○つながりづくりが難しい住民・コミュニティとの関係。これに課題があるのではないかと。つながりを作りにくい人と、どうやってつながりを作るかが課題。

○地域の情報が十分伝わっていないこと。

#### (2) 居場所づくり

地域の居場所の情報がなかなか伝わりづらくなっているという意見が多かった。男性の居場所、誰もが集える場というニーズもあるのではないかと。ここでもお話が出たんですが、交流や活動の拠点となる場の確保、開拓も求められている。こども食堂、外国籍のこどもなど、こどもへの支援活動の意見がかなり多い。先ほどの課題の数値化にもつながるのではないかと思う。

#### (3) 支えあいをどう作っていくか

ご意見が82件ありまして、人材・担い手が不足している。住民の方々も我々と同じような課題を感じています。それから相談や支援について、地域と情報共有を深める必要があるというご意見が多い。

#### (4) 自分らしく生きる

○人とのつながり、交流の重要性が増している。

○自分のスキルを活かせる機会をつくってほしい。生きがいづくりの必要性が上がっていました。

○自分らしく生きられる環境や制度仕組みが欲しいという意見が多く出ているという形です。

もう少し分析をして今後、年間のリボン計画の中で、どういう風に暮らしやすい街を作るか考えるという風に進めていきます。先ほどのお話の地域の意識の向上ということなのですが、これはきっと住民懇談会もそうですが住民自身がこの町の主人公であると考えたことなのではないかと思っている。その一つが住民懇談会で話し、居場所でそういう話も出来たらなど。あるいは地域の課題をプラットフォームで話すなど、そういう中で自分の街をどうしていこうかと一緒に考えることが必要ではないかと思う。社会福祉協議会はそのためのコーディネーター、一つの支援、活動を下支えするような役割だと思っている。一言で述べると福祉教育にもつながると思う。

#### 【常安副会長】

個人的に地域でこども食堂を始めて1年になり、地域で認知をされるまでに時間がかかりましたが、やっと地域の住民の方に知っていただけたかなと思う。なるべく私どものこども食堂は、食事や食材を地域のお子さんに手渡す役割を、若い人に任せたいと思いついて、主に青少対のジュニアリーダーにボランティアをしてもらい、役割を担ってもらっている。若い人がお子さんに接することで、そこでコミュニケーションが出来たり、勉強を見てもらったり、話し相手になっていただいたり、非常に助かっている。

去年の秋から特別出張所が中心となり、若者が社会参加するにはどうしたらいいかというグループができあがり、今は地域の若い方が40人ほどその会議に参加している。まだ成果は出ていないが、会議に参加している若い方の中から地域を担っていく方が出てくるのではないかと期待している。少しずつ地域を担っていく若い方が増えていくといいなと思う。

#### 【三木委員】

自治会として、地域づくりの中で、どうやって行こうかという中で、今回、大田区基本構想の中にこどもというキーワードを参考にしました。当然高齢者の対策もあるが、地域としては特別こどもをどうするかを考えようということで、2年前くらいから活動し始めました。

そういう中で地域から見ていくと、夏休みなどの長期休暇の期間、図書館などにこどもたちが行くが、人がいっぱい入りきれない子が結構いることがわかりまして、地域で何とかできないか考えたところ、地域が持っている会館を開放しようということになりました。こどもたちからお金を取るわけにもいかないの、無料開放して、地域の人たちに使ってもらおうと。ただ、幼稚園生や小学校低学年といった、あまりに小さいお子さんは、事故があってはいけないということで、最初の1年目は中学生以上という条件を設けて、活用してもらった。

しかし、休暇期間ということで、会館の中は事務員も居ない中での貸し出しになるため、事故があると非常に困ります。そのため、地域の町会の役員や民生委員のご協力を得ながら、毎日3～5名程度に常駐してもらい、朝9時～5時まで開きました。

最初の1年目は中学生以上という条件で、各地域の中学校へ案内したのですが、各地域に中学校は1校くらいしかないの、あまり周知が出来なかった。そこで反省しまして、地域の小学校・中学校・都立高校も含めて使ってもらおうと考えました。

また、自治会というのは自己防衛組織であるため、自分たちの地域を守る意識が強い一方で、地域外のことになるとうまく手を出さない傾向にあるが、地域に隣接した学校にも声をかけようということになった。声掛けに当たっては地域のlineを使ったり、対象の学校にビラを配布して周知するという方法をとりました。

そうして来ていただいたこどもたちの中には、勉強するこどももいれば、雑談して帰るこどももいて、自由に使ってもらえることが出来た。高校生が中学生の勉強を見ているケースもありました。

一番感心したのは、閉館時刻の午後5時頃になると、こどもたちがテーブルを片付け、雑巾がけをしてきれいにしてから帰ることです。片付けなどはせず、そのまま帰るのかと思っていたら、帰るときもきちんとやっていくという光景を見ました。そういう中で、我々は地域に会館を貸し出してよかったと思っておりますので、今後もこの活動は続けていきたいと考えております。まだ一部実施していない町会もありますが、できるだけ実施していけるように、連合会としては広報を進めていきたいと思っております。

## (2) 次年度の検討テーマ出しについて

事務局から委員に対してご意見を求めた。

### 【宮澤委員】

居場所についてお話ししたい。大身連という組織は、視覚障がい者・聴覚障がい者・肢体障がい者の3団体で構成しています。居場所について困っていることとして、視覚障がい者の方がお話をする際、視覚障がい者の方は見えませんから、お話を一気にしてしまう。それを聞いている方が、肢体障がい者の方なら聞けますが、聴覚障がい者の方には聞こえません。何を話しているかがわからないのではなく、聞こえないので、誰がここにいるのかもわかりません。そういうときの会議は困っています。

これをどうしたらいいかを聞くのですが、肢体障がいの方に真ん中に入ってもらって、次は視覚障がいの方、聴覚障がいの方と交互に話してもらおう。それがうまくいけばいいのですが、なかなかうまくいかない。その都度、他の方に相談、指示をしてもらうのが面倒、嫌だという方がいます。好きなように話したいですと言います。

聞こえない方と目が見えない方が話すのは、どういうことなのかを考えてもらいたいです。そういうことは行政の方はご存じだと思いますが、一般の方は分からない人が多いと思う。

視覚障がい者の方も聴覚障がい者の方も話をしなくなってしまう。会わない方がいいと考えてしまう。それで全く話し合わないということで、居場所が無くなってしまいます。それを我々はどうしようかと長い間考えておりますが、うまくいきません。そういうことを考えていただければと思っております。

### 【炭谷会長】

障がい者を有する方の居場所づくりは、大変難しいですが、必要性が高い。私の中で印象に残っていることとして、北海道に新得町という町があるが、この町には全国から聴覚障がい者が集まる。なぜ集まるのかというと、この町は聴覚障がい者にとって非常に住みやすいからです。コミュニケーションを住民の方々に理解がある。元々の発祥は、昭和20年代に聴覚障がい者の方が施設を作った。その方が熱心に聴覚障がい者の問題をとり上げたため、町全体が聴覚障がい者の居場所になった。人口は6,000人ほどだったと思うが、1,000人ほどが福祉に携わっている。

### 【岩田委員】

先ほどからのお話で、医療分野では、あまり聞いたことがないような話もいろいろ出てきていて、そういう視点でも考えなければいけないんだなということを感じましたので、大変勉強になりました。

医療の視点からお話すると、先ほどお話を上がった、障がいを持っている方や、孤立している方は、なかなか医療につながらないという現状があります。そういう方たちに対して、ある程度こちらからも手を差し伸べることはできるかもしれないが、やはり個人から来ていただかないと治療につなげることが出来ないというような点もあります。いかに支援をして、きてもらうか。体が悪くて治そうとしているが、どこに行けばいいのかがわからない。そういった方たちに支援をして、医療につなげていただくといった環境整備が必要になってくると思います。

それから、障がいがある、あるいは精神的なもので、他人とのコミュニケーションが難しいという方に対して、医療者側からの対応が難しく、治療を拒否・シャットアウトしてしまうということも現状ある点ですので、医師会・歯科医師会・薬剤師会からも勉強会や講習会といったもので周知徹底。それから個人レベルにはなってきますが、スキルアップをできるような機会を増やしていけるようにと考えております。

### 【中村委員】

私たちも元々、高齢者の方たちの支援をする活動をしています。今日話を聞いたところも、私たちの活動に当てはまる場所があるなと思い、自ら考えていかなければいけない時代なのだと感じたので、いい機会でした。

意見交換会のテーマ1について聞いたかったことがあります。大田区福祉人材育成・交流セ

ンターという言葉がありました。活動のヒントになるものがあるかもしれないので、もう少し細かく事業内容を教えていただきたい。eラーニングの話は聞いたことがあるが、今の時代だからこそできる何かがあるのか、ヒントがあればと思っています。

#### 【事務局】

取り組みのご紹介をさせていただきます。

本日のテーマ1にありました、「支援者の孤立」について、大田区福祉人材育成・交流センターは、福祉従事者の方々が、分野や所属を超えて、交流を図ることで、人材の育成や定着を行って行くといった取り組みを行っております。コロナ禍が少し落ち着いた令和4年度からの機能設置でしたので、eラーニングの話も以前させていただきましたが、対面での研修も行っています。複合的な課題を有する区民の方が増えておりますので、8050世帯への支援や、意思決定支援といった様々なテーマをそれぞれ設定し、事例検討も行う研修を年6回程度行っています。

その他、今回のテーマ型意見交換会にもありましたが、支援者が横のつながりを強化する、顔の見える関係を作るというところで、「福祉従事者カフェ」というキャッチコピーを設けて、個別支援のスキルを高めるということから少し離れて、福祉従事者どうしが、福祉の仕事の魅力を語り合ったり、これからの仕事のありかたについて意見交換をするなど、毎回テーマを設けて年3回実施しています。

この後2月には、事業者の方々に有効なカスハラ対策について学んでいただくための人材定着セミナーとして、カスハラをテーマにセミナーを実施したり、育成や定着を目的に、様々なセミナーや研修を実施しています。

#### 【川崎委員】

精神障がい者のことがわからないということで、以前申し上げましたが、メンバーも参加する喫茶店をやっています。皆さんが精神障がいのことを理解してくれますし、近所の、特に高齢の方が集まる居場所になっている。小学校が近くにあるため、小学生も立ち寄ってくれる。クリスマス会などの行事をするたびに小学生や高齢者、精神障がいを持っている方がうまく関係づくりができていると感じています。

しかし、どうしても家族会が高齢化しており、担い手が少なくなっていることが、考えなくてはいけないことの一つです。もう一つは、精神障がい者はひきこもる傾向にあります。ひきこもってしまって、全然情報が入らないという人をこれからどうしたらいいかが考えていかなければいけないと思っています。

#### 【炭谷会長】

精神障がい者は本当に孤立しやすい。私自身も鴻巣病院（精神科病院）を運営しています。鴻巣病院の事業として、「夢の実（ゆめのみ）」というこども食堂を運営している。ここは地域のこどもたちが利用します。そこでボランティアとして働いていただいているのが、鴻巣病院でうつ病などが完快した方、その人が地域に戻るには自信がないが、こども食堂でボランティアとして活動することで徐々に社会復帰するという大変効果があります。こどもたちにも良い影響がありますし、精神障がい者の方にも社会復帰の役に立っている。

まさに人のつながりが病気も治していくという効果を実感していますが、精神障がい者や発達障がいの方も、今日のテーマである居場所を作り、そこでいろんな人のつながりをつくって活動していくと効果があると実感しています。

- 4 推進委員の任期満了に伴う次期委員について  
事務局から委員としてのご尽力に御礼申し上げるとともに、次期委員について報告した。
- 5 次回の予定  
事務局から、7月頃に開催予定であることを周知した。
- 6 閉会